

良忠における廻向発願心積について

沼倉 雄 人

廻向発願心とは『観経』に示される念仏行者が具えるべき三心のうちのひとつであり、⁽¹⁾唐代の善導大師は三心を実践の上で重要視し、かつ浄土教的に解釈・詳説し浄土宗祖法然上人（以下、諸師の尊称を略す）は『選択集』第八章において善導『観経疏』の三心積をそのまま引文として示されている。

善導の説示の廻向発願心とは

「三者廻向發願心」。言「廻向發願心」者、過去及以今生身口意業所修世出世善根、及隨喜他一切凡聖身口意業所修世出世善根、以此自他所修善根、悉皆真實深信心中迴向願生彼國。故名迴向發願心也。（『浄全』二、五八頁下）。

というものであり、法然は『選択集』において、廻向發願心之義、不可俟別釋。（『聖典』五六頁）。と述べており、至誠心・深心に比べ、とくに全面的に善導の解釈に依っている。

しかし法然門下に至り三心の理解に差異が生じ、さまざまな解釈が示されるようになる。三祖良忠は著作のなかで他の法然門流の異義に対して反論を行っている。法然以後の善導解釈は単なる語句解説から、善導・法然を素材として門下が自説を展開したものであり、門下諸師の説を理解し、相互の影響等を整理するだけでも容易ではない。

本論においては良忠以前・法然門下では廻向発願心がどのように定義されていたのかを整理したうえで、良忠が廻向発願心をどのようにとらえて定義していたのかを考察した。

善導の廻向発願心とは、至誠心・深心中において自他の修した種々の善根を振り向けて浄土に往生しようと願う心であるが、⁽²⁾法然は主著である『選択集』において、廻向発願心に関して私見を述べておらず、また御法語等においても、ほとんど善導の説示に依っている。⁽³⁾

そのようななか、法然の門弟である証空・隆寛・長西・聖光の廻向発願心の解釈を整理すると次のようになる。

証空……阿弥陀仏の願と行が成就し、行者が至誠心中において捨てた行も阿弥陀仏の功德であり、往生の因となると領解すること。
隆寛……他力に帰したうえで、必ず往生ができるという想いが決定して他の見解に動揺されない信心。

長西……諸善根を廻向し浄土を欣求することであると領解すること。
聖光……すでになした正助二行をもって往生することができることを確信する心。

これら諸師の説示がみられるが、良忠は『浄土大意抄』において廻向発願心を「一切の善根を廻して、浄土に生ぜん」と願う心」としている。ただしそれはことさらに往生のために善根を修して廻向せよとするものではないと述べている。またその説示を時系列的にみてみると著作活動初期に著された『浄土大意抄』では「廻向」を中心に解説されているが、それ以降の著作では聖光の説示を踏まえながら「発願」に重点がおかれた解説がなされている。このような思想的变化は、聖光から受けた説示をそのままに堅持するのみではなく、自身の修学の深まりとともに形成された良忠独自の教学の一端であるとみられる。

今回、とりあげたなか『東宗要』には西山派証空の教義に対する批判とうかがわれる説示がみられたが、良忠は証空の説に対して「非『選擇』意」「相違祖師所判」として批判していた。良忠の廻向発願心はことさらに往生のために善根を修して廻向せよとするものではないため、おそらくこのような立場にあるから証空の説が「往生のためには諸行もまた

積極的に修すべきである」と勧めているととらえられ、往生のために専修念仏一行を法然の教えと矛盾することからこのような批判をしたのではないかと考える。これは良忠の教義的判断基準がなにあつたのかがうかがわれるものであるが、良忠は法然の説示にみられないものを単純に否定しているのだろうか。良忠において他流に対する批判の判断基準がどのような点にあるのかをみなければ、良忠の教学の特徴をとらえることはできないのではないかと考える。

註

(1) 若有衆生願生彼國者發三種心即便往生。何等爲三。一者至誠心、一者深心、三者迴向發願心。具三心者必生彼國。(『正藏』一・二、三四頁下)。

(2) 佐藤成順浄土選書『善導の宗教』一四三頁参照。

(3) 法然は御法語や消息類にも三心について述べる箇所がみられるが、ほとんど善導の説示に依り、『選択集』以外でも私見を加えて述べることはない。

「念仏大意」……迴向發願心トイフハ、自他ノ行ヲ眞實心ノ中ニ迴向發願スル也。(『昭法全』四〇九頁)。

「要義問答」……三二迴向發願心トイフハ、一切ノ善根ヲコトコトクミナ迴向シテ、往生極樂ノタメトス。決定眞実ノココロノ中ニ迴向シテ、ムマルオモヒヲナスナリ。コノココロ深心ナル事、金剛ノコトクニシテ、一切ノ異見異學別解別行ノ人等ニ動乱破壊セラレサレ。(『昭法全』六二一―六二二頁)。

(大学院仏教学研究科仏教学専攻博士後期課程)